

石川啄木作品集
第二卷

昭和出版社

石川啄木作品集第二卷

昭和四十年十二月一日發行

定価三百八十円

著者 石川啄木

発行者 八木敏夫

印刷者 平池晟悟

発行者 昭和出版社

東京都千代田区神田神保町一ノ四五

雲は天才である……………一

葬……………三七

漂……………六

菊池君……………九

病院の窓……………一七

二筋の血……………一七

天鵞絨……………一三

葉書……………二三

雲は天才である

六月三十日、S——村尋常高等小學校の職員室では、今しも壁の掛時計が平常の如く極めて活氣のない懶うげな悲鳴をあげて、——恐らく此時計までが學校教師の單調なる生活に感化されたのであらう、——午後の第三時を報じた。大方今は既四時近いのであらうか。といふのは、田舎の小學校にはよく有勝な奴で、自分が此學校に勤める様になつて既に三ヶ月にもなるが、未だ嘗て此時計がK停車場の大神計と正確に合つて居た例がない、といふ事である。少なくとも三十分、或時の如きは一時間と二十三分も遅れて居ましたと、土曜日毎に該停車場から程遠くもあらぬ郷里へ歸省する女教師が云つた。これは、校長閣下自身の辯明によると、何分此校の生徒の大多數が農家の子弟であるので、時間の正確を守らうとすれば、勢い始業時間迄に生徒の集りかねる恐れがあるか

ら、といふ事であるが、實際は、勤勉なる此邊の農家の朝飯は普通の家庭に比して餘程早い。然し同僚の誰一人、敢て此時計の怠慢に對して、職務柄にも似合はず何等匡正の手段を講ずるものはなかつた。誰しも朝の出勤時間の、遅くなるなら格別、一分たりとも早くなるのを喜ぶ人は無いと見える。自分は？ 自分と雖ども暫は、幾年來の習慣で朝寢が第二の天性となつて居るので……午後の三時、規定の授業は一時間前に悉皆終つた。平日ならば自分は今正に高等科の教壇に立つて、課外二時間の授業最中であるべきであるが、この日は校長から、お互月末の調査もあるし、それに今日は妻が頭痛でヒドク弱つてゐるから可成早く生徒を歸らしたい、課外は休んで貰へまいかといふ話、といふのは、破格な次第ではあるが此校長の一家四人——妻と子供二人と——は、既に久しく學校の宿直室を自分等の家として居るので、村費で雇はれた小使が襦袢の洗濯まで其職務中に加へられ、

牝鷄常に曉を報ずるといふ内情は、自分もよく知つて居る。何んでも妻君の顔色の曇つた日は、この一校の長たる人の生徒を遇する極めて酷だ、などいふ噂もある位、推して知るべしである。自分は舌の根まで込み上げて來た不快を辛くも噛み殺して、今日は餘儀なく課外を休んだ。一體自分は尋常科二年受持の代用教員で、月給は大枚金八圓也、毎月正に難有頂戴して居る。それに受持以外に課外二時間宛と來ては、他日には勞力に伴はない報酬、否、報酬に伴はない勞力とも見えやうが、自分は露聊かこれに不平は抱いて居ない。何故なれば、この課外教授といふのは、自分が抑々生れて初めて教鞭をとつて、此校の職員室に末席を濫すやうになつての一週間目、生徒の希望を容れて、といふよりは寧ろ自分の方が生徒以上に希望して開いたので、初等の英語と外國歴史の大體とを一時間宛とは表面だけの事、實際は、自分の有つて居る一切の知識、(知識といつても無學識貧乏なものであるが、自分は、然し、自ら日本一の代用教員を以て任じて居る。)一切の不平、一切の經驗、一切の思想、——つまり一切の精神が、この二時間のうちに、機を覗ひ時を待つて、吾が舌端より火箭となつて迸しる。的

きに箭を放つのではない。男といはず女といはず、既に十三、十四、十五、十六、といふ年齢の五十幾人のうら若い胸、それが乃ち火を待つばかりに紅血の油を盛つた青春の火蓋ではないか。火箭が飛ぶ、火が油に移る、嗚呼そのハッ／＼と燃え初むる人生の烽火の煙の香ひ！英語が話せれば世界の中何處へでも行くに不便はない。ただこの平凡な一句でも自分には百萬の火箭を放つべき堅固な弦だ。昔希臘といふ國があつた。基督が磔刑にされた。人は生れた時何物をも持つて居ないが精神だけは持つて居る。羅馬は一都府の名で、また昔は世界の名であつた。ルーソーは歐羅巴中に響く喇叭を吹いた。コルシカ島はナポレオンの生れた處だ。バイロンといふ人があつた。トルストイは生きて居る。ゴルキーが以前放浪者で、今肺病患者である。露西亞は日本より豪い。我々はまだ年が若い。血のない人間は何處に居るか。……あゝ、一切の問題が皆火の種だ。自分も火だ。五十幾つの胸にも火事が始まる。四間に五間の教場は宛然熱火の洪水だ。自分の骨露はに瘦せた拳が籥と卓子を打つ。と、躍り上るものがある、手を振るものがある、萬歳と叫ぶものがある。完たく一種の暴動だ。自分の眼瞼から感激

の涙が一滴溢れるや最後、其處にも此處にも聲を擧げて泣く者、上氣して顔が火と燃え、聲も得^え出^ださで革命の神の石像の様に突立つ者、さながら之れ一幅生命反亂の活畫^{かつが}圖^ずが現はれる。涙は水ではない、心の幹をしぼつた樹脂である、油である。火が愈々燃え擴がる許りだ。『千九百〇六年……此年〇月〇日、S——村尋常高等小學校内の一教場に暴動起る』と後世の世界史が、よしや記さぬまでも、この一場の恐るべき光景は、自分並びに五十幾人のジャコビン黨の胸板には、恐らく「時」の破壊の激浪も消し難き永久不磨の金字で描かれるであらう。疑ひもなく此二時間は、自分が一日二十四時間千四百四十分の内、最も得意な、愉快な、幸福な時間で、大方自分が日々この學校の門を出入する意義も、全くこの課外教授がある爲めであるらしい。然し乍ら此日六月三十日、完全なる『教育』の模型として、既に十幾年の間身を教育勅語の御前に捧げ、口に忠信孝悌の語を繰返す事正に一千萬遍、其思想や穩健にして中正、其風采や質樸無難にして具さに平凡の極致に達し、平和を愛し溫順を尙ぶの美德餘つて、妻君の尻の下に布かるゝをも敢て恥辱とせざる程の忍耐力あり、現に今このS——村に於ては、毎

月十八圓といふ村内最高額の俸給を受け給ふ——田島校長閣下の一言によつて、自分は不本意乍ら其授業を休み、間接には馬鈴薯に目鼻よろしくといふマダム田島の御機嫌をとつた事になる不面目を施し、退いて職員室の一隅に、兒童出席簿と睨み合をし乍ら算盤の珠をさしたり減いたり、過去一ヶ月間に於ける兒童各自の出席簿から、其總數、其歩合を計算して、明日は瘦犬の様な俗吏の手に渡さるべき所謂月表なるものを作らねばならぬ。それのみならず未だしも、成績の調査、缺席の事由、食料携帶の狀況、學用品供給の模様など、名目は立派でも殆んど無意義な仕事が少ないからである。茲に於て自分は感じた、地獄極樂は決して宗教家の方便ではない、實際我等の此の世界に現存して居るものである、と。さうだ、この日の自分は明らかに校長閣下の一言によつて、極樂へ行く途中から、正確なるべき時間迄が娑婆の時計と一時間も相違のある此の蒸^むし熱^{あつ}き地獄に墮^おされたのである。算盤の珠のパチ／＼／＼といふ音、これが乃ち取りも直さず、中世紀末の大冒險家、地獄煉獄天國の三界を跨^{また}にかけたダンテ・アリギエリでさへ、聞^きいては流石に膽^{きも}を冷した『パペ、サタン、パペ、サタン、

アレツベ」といふ奈落の底の聲ではないか。自分は實際、この計算と來ると、吝嗇な金持の爺が己の財産を勘定して見る時の様に、ニコ／＼ものでは兎でも行けないのである。極樂から地獄！この永劫の宣告を下したものは誰か、抑々誰か。曰く、校長だ。自分は此日程校長の顔に表れて居る醜態と缺點とを精密に見極めた事はない。第一に其鼻下の八字髭が極めて光澤が無い、これは其人物に一分一厘の活氣もない證據だ。そして其髭が鰻のそれの如く兩端遙かに頤の方面に垂下して居る、恐らく向上といふ事を忘却した精神の象徴はこれであらう。亡國の髭だ、朝鮮人と昔の漢學の先生と今の學校教師にのみあるべき髭だ、黒子が總計三箇ある、就中大きいのが左の目の下に不吉の星の如く、如何にも目障りだ。これは俗に泣黒子と云つて、幸にも自分の一族、乃至は平生畏敬して居る人々の顔立には、ついぞ見當らぬ道具である。宜なる哉、この男、どうせ將來好い目に逢ふ氣づかひが無いのだから。……數へ来れば幾等もあるが、結局、田舎草刈りといふ結論に歸着した。詰り、一毫の微とも自分の氣に合ふ點がなかつたのである。

この不法なるクーデターの顛末が、自分の口から、生徒控處の一隅で、残りなく我がジャコビン黨全員の耳に達せられた時、一團の暗雲あつて忽ちに五十幾個の若々しき天真の顔を覆うた。樂園の光明門を閉ざす鉛色の雲霧である。明らかに彼等は、自分と同じ不快、不平を一喫したのである。無論自分は、かの妻君の頭痛一件まで持ち出したのではない、が、自分の言葉の終るや否や、或者はドンと一つ床を蹴つて一喝した、『校長馬鹿ッ。』更に他の聲が続いた、『鰻ッ。』『蒲焼にするぞッ。』最後に『チエースト』と極めて陳腐な奇聲を放つて相和した奴もあつた。自分は一瞬の微笑を彼等に注ぎかけて、靜かに歩みを地獄の門に向けた。纏て十五歩も歩んだ時、急に後の騒ぎが止んだ、と思ふと、『ワン、ツー、スリー、泥鰻——』と、校舎も爲めに動く許りの閑の聲、中には絹裂く様な鋭い女生徒の聲も確かに交つて居る。餘りの事に振向いて見た、が、此時は既に此等革命の健兒の半數以上は生徒昇降口から風に狂ふ木の葉の如く戸外へ飛び出した所であつた。恐らく今日も門前に遊んで居る校長の子供の小さい頭には、時ならぬ拳の雨の降つた事であらう。然し控處にはまだ空しく歸りかねて残つ

た者がある。機會を見計つて自分に何か特にお話を請求しようといふ執心の輩。髪長き兒も二人三人見える、——總て十一二人。小使の次男なると、女教師の下宿して居る家の兒と、(共に其縁故によつて、校長閣下から多少大目に見られて居る)この二人は自分の跡から尾いて來たまゝ、先刻からこの地獄の入口に門番の如く立つて、中の様子を看守して居る。

入口といふのは、紙の破れた障子一枚によつて此室と生徒控處とを區別したもので、校門から眞直の玄關を上ると、すぐ左である。この入口から、我が當面の地獄、——天井の極く低い、土疊敷位の、汚黴だらけな壁も、古風な小形の窓も、年代の故で歪んだ皮椅子も皆一種人生の倦怠を表はして居る職員室に這入ると、向つて四角形の都合四脚の卓子が置かれてある。突當りの並んだ、脚の、右が校長閣下の席で、左は檢定試験上りの古手の首席訓導、校長の傍が自分で、向ひ合つての一腳が女教師のである。吾校の職員と云へば唯この四人だけ、自分が其内最も末席なは云ふ筈もない。よし百人の職員があるにしても代用教員は常に末席を仰せ付かる性質のものであるのだ。御規則とは随分陳腐な洒落である。サテ、自分

の後には直ちに障子一重で宿直室になつて居る。

此職員室の、女教師の背なる壁の掛時計が懶うげなる悲鳴をあげて午後三時を報じた時、其時四人の職員は皆各自の卓子に相割據して居た。——卓子は互に密接して居るものの、此時の状態は確かに一の割據時代を現出して居たので。——二十三分も續いた『バベ、サタン、アレック』といふ苦しげなる聲は、三四分前に至つて、足音に驚いて卒かに啼き止む小田の蛙の歌の如く、嚙と計り止んだ。と同時に、(老いたる尊とき導師は震なくダシテの手をひいて、更に他の修羅園内に進んだのであらう。)新らしき一陣の殺氣と面を打つて、別箇の光景をこの室内に描き出したのである。

詳しく説明すれば、實に語らぬ話であるが、問題は斯うである。二三日以前、自分は不圖した轉機から思附いて、このS——村小學校の生徒をして日常朗唱せしむべき、云はゞ校歌といつた様な性質の一曲詞を作り、そして作曲した。作曲して見たのが此時、自分が呱呱の聲をあげて以來二十一年、實際初めてあるに關らず、恥かし乍ら自白すると、出来上つたのを聲の透る我が妻に歌はせて聞いた時の感じでは、少々巧い、と思はれた。今

でもさう思つて居るが……。妻からも賞められた。その夜遊びに來た二三の生徒に、自分でキオリンを弾き乍ら教へたら、矢張り賞めてくれた、然も非常に面白い、これからは毎日歌ひますと云つて。歌詞は六行一聯の六聯で、曲の方はハ調四分の二拍子、それが最後の二行が四分の三拍子に變る。斯う變るので一段と面白いのですよ、と我が妻は云ふ。イヤ、それはそれとして、兎も角も自分はこれに就いて一點疚しい處のないのは明白な事實だ。作歌作曲は決して盗人、僞善者、乃至一切破廉恥漢の行爲と同一視さるべきではない。マサカ代用教員如きに作曲などをする資格がないといふ規定もない筈だ。して見ると、自分は不相變正々堂々たるものである、俯仰して天地に恥づる所なき大丈夫である。所が、豈獨んぞ圖らんや、この堂々として赤裸々たる處が却つて敵をして矢を放たしむるのとなつた所以であつたのだ。ト何も大袈裟に云ふ必要もないが、其歌を自分の教へてやつた生徒は其夜僅か三人（名前も明らかに記憶して居る）に過ぎなかつたが、何んでもジャコピン黨員の胸には皆同じ色——若き生命の淺緑と湧き立つ春の泉の血の色との火が燃えて居て、唇が皆一樣に乾いて居る爲めに野火

雲は天才である

の移りの早かつたものか、一日二日と見る／＼うちに傳唱されて、今日は早や、多少調子の違つた處のないでもないが、高等科生徒の殆んど三分の二、イヤ五分の四迄は確かに知つて居る。晝休みの際などは、誰先立つとなぐ運動場に一蛇のボロテージ行進が始つて居た。彼は百人近くはあつたらう、尤も野次馬の一群も立交つて居たが、口々に歌つて居るのが乃ち斯く申す新田耕助先生新作の校友歌であつたのである。然し何も自分の作つたものが大勢に歌はれたからと云つて、決して恥でもない、罪でもない、寧ろ愉快なものだ、得意なものだ。現に其行進を見た時は、自分も何だか氣が浮立つて、身體中何處か斯う操られる様で、僅か五分間許りではあるが、自分も其行進列中の一人と迄なつて見た位である。……問題の鍵は以後である。

午後三時前三——四分、今迄矢張り不器用な指を算盤の上に躍らせて、『パベ、サタン、パベ、サタン』を繰返して居た校長田島金藏氏は、今しも出席簿の方の計算を終つたと見えて、やをら頭を擡げて煙管を手に持つた。ボンと卓子の縁を敲く、トタンに、何とも名狀し難い、狸の難産の様な、水道の栓から草鞋でも飛び出しさ

うな、——も少し適切に云ふと、隣家の豚が夏の真中に感冒をひいた様な奇響——敢て、響といふ——が、恐らく仔細に分析して見たら出損なつた咳の一種でもあらうか、彼の巨大なる喉佛の邊から鳴つた。次いで復幽かなのが一つ。もうこれ丈かと思ひ乍ら自分は此時算盤の上に現はれた八四・七九といふ數を月表の出席歩合男の部へ記入しようと、筆の穂を一寸噛んだ。此刹那、沈痛なる事晝寢の夢の中で去年死んだ黒猫の幽霊の出た様な聲あつて、

『新田さん。』

と呼んだ。校長閣下の御聲掛りである。

自分はヒョイと顔を上げた。と同時に、他の二人——首座と女教師も顔を上げた。此一瞬からである、『バベ、サタン、バベ、サタン、アレツベ』の聲の礫と許り聞えずなつたのは。女教師は黙つて校長の顔を見て居る。首席訓導はグイと身體をもちつて、煙草を吸ふ準備をする。何か心に待構へて居るらしい。然り、この僅か三秒の沈黙の後には、近頃珍らしい風が吹き出したのだもの。

『新田さん。』と校長は再び自分と呼んだ。餘程嚴格な

態度を裝うて居るらしい。然しお氣の毒な事には、平凡と醜惡とを「教育者」といふ型に入れて鑄出した此人相には、最早他の何等の表情をも容るべき空虚がないのである。誠に完全な「無意義」である。若し強いて嚴格な態度でも裝はうとするや最後、其結果は唯對手をして一種の滑稽と輕量な憐愍の情とを起させる丈だ。然し當人は無論一切御存じなし、破鐘の欠伸する様な訥辭は一步を進めた。「君に少しお聞き申したい事があります。ナ。エート、生命の森の……。何でしたつね、初の句は？（と首席訓導を見る、首座は、甚だ迷惑といふ風で黙つて下を見た。）ウン、左様々々、春まだ浅く月若き、生命の森の夜の香に、あくがれ出でて、……とかいふアノ唱歌です。アレは、新田さん、貴君が秘かに作つて生徒に歌はせたのだと云ふ事です、眞實ですか。』

『嘘です。歌も曲も私の作つたには相違ありませんが、秘かに作つたといふのは嘘です。蔭仕事は嫌ひですから。』

『デモさういふ事でしたつね、古山さん先刻の御話では。』と再び隣席の首席訓導を顧みる。

古山の顔には、またしても迷惑の雲が懸つた。矢張り

黙つた儘で、一閃の偷視を自分に注いで、煙を鼻からフウと出す。

此光景を目撃して、ハ、ア、然うだ、と自分は早や一切を直覺した。かの正々堂々赤裸々として俯仰天地に恥づるなき我が歌に就いて、今自分に持ち出さんとして居る抗議は、蓋し泥鰻金藏閣下一人の頭腦から割出したものではない。完たく古山と合議の結果だ。或は古山の方が當の發頭人であるかも知れない。イヤ然うあるべきだ、この校長一人丈では、如何して這般元氣の出る管が無いのなもの。一體この古山といふのは、此村土着の者であるから、既に十年の餘も斯うして此學校に居る事が出来たのだ。四十の坂を越して矢張五年前と同じく十三圓で満足して居るのでも、意氣地のない奴だといふ事が解る。夫婦喧嘩で有名な男で、(此點は校長に比して稍々溫順の善徳を缺いて居る。)話題と云へば、何日でも酒と、若い時の經驗談とやらの女話、それにモ一つは釣道樂、と之れだけである。最もこの釣道樂だけは、この村で屈指なもので、既に名人の域に入つて居ると自身も信じ人も許して居る。随つて主義も主張もない、(昔から釣の名人になるやうな男は主義も主張も持つてない

と相場が極つて居る。)随つて當年二十一歳の自分と話が合はない。自分から云はせると、校長と謂ひ此男と謂ひ、營養不足で天然に立枯になつた材の木の様なもの、松なら枯れても枝振といふ事もあるが、何の風情もない。彼等と自分とは、毎日吸ふ煙草までが違つて居る。彼等の吸ふのは枯れた橡の葉の粉だ、辛くもないが甘くもない、香もない。自分ののは、五匁三錢の安物かも知れないが、兎に角正真正正銘の煙草である。香の強い、辛い所に甘い所のある、眞の活々とした人生の煙だ。リリィを一本吸うたら日が廻つて來ましたつけ、と何日か古山の云うたのは、蓋し實際であらう。斯くの如くして、自分は常に職員室の異分子である、繼ッ子である、平和の攪亂者と目されて居る。若し此小天地の中に自分の話相手になる人を求むれば、それは實に女教師一人のみだ。芳紀や、過ぎて今年正に二十四歳、自分には三歳の姉である。それが未だ、獨身で熱心なクリスチャンで、讚美歌が上手で、新教育を享けて居て、思想が先づ健全で、顔は? 顔は毎日見て居るから別段目にも立たないが、頬は桃色で、髪は赤い、目は年に似はず若々しいが、時々判斷力が閃めく、尋常科一年の受持であるが、

誠に善良なナースである。で、大抵自分の云ふ事が解る。理のある所には蛇度同情する。然し流石に女で、それに稍々思慮が有過ぎる傾があるので、今日の様な場合には、敢て一言も口を出さない。が、其眼珠の輕微なる運動は既に十分自分の味方であることを語つて居る。況んや、現に先刻この女が、自分の作つた歌を誰から聞いたものか、低聲に歌つて居たのを、確かに自分は聴いたのだから。

さて、自分は此處で、かの歌の如何にして作られ、如何にして傳唱されたかを、詳らかに説明した。そして、最後の言葉が自分の唇から出て、校長と首座と女教師と三人の箇の耳に達した時、其時、カーン、カーン、カーン、と掛時計が、懶氣に叫んだのである。突然『アーア』といふ聲が、自分の後、障子の中から起つた。恐らく頭痛で弱つて居るマダム馬鈴薯が、何日もの如く三歳になる女の兒の帯に一條の紐を結び、其一端を自身の足に繋いで、危い處へやらぬ様にし、切爐の側に寝そべつて居たのが、今時計の音に眞晝の夢を覺されたのであらう。『アーア』と又聞えた。

三秒、五秒、十秒、と恐ろしい沈黙が続いた。四人の

職員は皆各自の卓子に割據して居た。この沈黙を破つた一番鐘は古山村の木である。

『其歌は校長さんの御認可を得たのですか。』

『イヤ、決して、斷じて、許可を下した覚えはありません。』と校長は自分の代りに答へて呉れる。

自分はケロリとして煙管を啣へ乍ら、幽かな微笑を女教師の方に向いて洩した。古山もまた煙草を吸ひ始める。

校長、いゝと見ると、何時の間にか赤くなつて、鼻の上から水蒸氣が立つて居る。『どうも、餘りと云へば自由が過ぎる。新田さんは、それゝ新教育も享けてお出でだらうが、どうもその、少々身勝手が過ぎるといふもので……。』

『さうですか。』

『さうですか。』それを解らぬ筈はない。一體その、エート、確か本年四月の四日の日だつたと思ふが、私が郡視學さんの平野先生へ御機嫌伺ひに出た時でした。さう、確かに其時です。新田さんの事は郡視學さんからお話があつたもので、遂私にも新田さんを此學校に入れた次第で、郡視學さんの手前もあり、今迄は随分私の方で

遠慮もし、寛裕にも見て置いた譯であるが、然し、さう身勝手が過ぎると、私も一校の司配を預かる校長として、『と句を切つて、一寸反り返る。此機を逸さず自分は云つた。』

『どうぞ御遠慮なく。』

『不埒だ。校長を尻とも思つて居らぬ。』

この聲は少し高かつた。握つた拳で卓子をドンと打つ、驚いた様に算盤が床へ落ちて、けたましい音を立てた。自分は今迄校長の斯う活氣のある事を知らなかつた。或は自白する如く、今日迄は郡視學の手前遠慮して居たかも知れない。然し彼の云ふ處は實際だ。自分は實際此校長位は尻とも思つて居ないのだから。この時、後の障子に、サと物音がした。マダム馬鈴薯が這ひ出して來て、様子如何にと耳を濟まして居るらしい。

『只今伺つて居りました處では、』と白ツばくれて古山が口を出した、『どうもこれは校長さんの方に理がある様に、私には思はれますので、然し新田さんも別段悪い處もない、唯その校歌を自分勝手に作つて、自分勝手に生徒に教へたといふ、つまり、順序を踏まなかつた點が、大に、イヤ、多少間違つて居るのでは有るまいか』

と、私には思はれます。』

『此學校に校歌といふものがあるのですか。』

『今迄さういふものは有りませんで御座りました。』

『今では?』

今度は校長が答へた。『現にさう云ふ貴君が作つたではないか。』

『問題は其處ですて。私には順序……』

皆まで云はさず自分は手をあげて古山を制した。

『問題も何も無いぢやないですか。既に私の作つたアレを、貴君方が校歌だと云つてゐるぢやありませんか。私はこのS——村尋常高等小學校の校歌を作つた覚えはありますぬ。私はたゞ、この學校の生徒が日夕吟誦しても差支のない様な、校歌といふやうな性質のものを試みに作つた丈です。それを貴君方が校歌というて居られる。詰り、校歌としてお認め下さるのですな。そこで生徒が皆それを、其校歌を歌ふ。問題も何も有つた話ぢやありませんまい。此位天下泰平な事はないでせう。』

校長と古山は顔を見合せる。女教師の目には満足した様な微笑が浮んだ。入口の處には二人の立番の外に、新らしく來たのがある。後の障子が颯と開いて、腰の邊に

細い紐を卷いたなり、帯も締めず、垢臭い木綿の細かい縞の袴をダラシなく着、胸は露はに、抱いた手に乳房^{けやう}啣^{くは}せ乍ら、靜々と立現れた化生の者がある。マダム馬鈴薯の御入來だ。袴には黒く汗光りのする縞子の半襟がかゝつてある。如何考へても、決して餘り有難くない御風體である。針の様に鋭どく釣上つた眼尻から、チヨと自分を睨^{にら}んで、校長の直ぐ傍に突立つた。若しも、地獄の底で、白髮灸の如き搜せさらばひたる斃死^{さつ}の狀の人が、吾兒の骨を諸手に握つて、キリ／＼と囁む音を、現實の世界で目に見る或形にしたら、恐らくそれは此女の自分を一睨した時の目付それであらう。此目付で朝な夕な胸を刺されたる校長閣下の心事も亦、考へれば諒とすべき點のないでもない。

生ける女神——貧乏の？——は、石像の如く無言で突立つた。やがて電光の如き變化が此室内に起つた。校長は今迄忘れて居た嚴格の態度を再び装はんとするものの如く、其顔面筋肉の二三ヶ所に、或る運動を與へた。援軍の到來と共に、勇氣を回復したのか、恐怖を感じたのか、それは解らぬが、兎に角或る激しき衝動を心に受けたのであらう。古山も面を上げた。然し、もうダメであ

る。攻勢守勢既に其地を代へた後であるのだもの。自分は敵勢の加はれるに却つて一層勝誇つた様な感じがした。女教師は、女神を一目見るや否や、譬へ難き不快の霧に清い胸を閉されたと思えて、忽ちに俯いた。見れば、恥辱を感じたのか、氣の毒と思つたのか、それとも怒つたのか、耳の根迄紅くなつて、鉛筆の尖でコツ／＼と卓子を咬いて居る。

古山が先づ口を切つた。『然し、物には總て順序がある。其順序を踏まぬ以上は、……一足飛びに陸軍大將にも成れぬ譯ですて。』成程古今無類の卓説である。

校長が續いた。『其正當の順序を踏まぬ以上は、たとへば抄歌に採用して可いものであつても未だ校歌とは申されない。よし立派な免狀を持つて居らぬにしても、身を教育の職に置いて月給迄貰つて居る者が、物の順序を考へぬとは、餘りといへば餘りな事だ。』

云ひ終つて堅く口を閉ぢる。氣の毒な事には其への字が餘り恰好がよくないので。

女神の視線が氷の矢の如く自分の顔に注がれた。返答如何にと促がすのであらう。トタンに、無雜作に、といふよりは寧ろ、無作法に束ねられた髪から、櫛がこり落

ちた。敢て拾はうともしない。自分は笑ひながら云うた。

『折角順序々々と云ふお言葉ですが、一體何ういふ順序があるのですか。恥かしい話ですが、私は一向存じませぬので。……若し其校歌採用の件とかの順序を知らない爲めに、他日誤つて何處かの校長にでもなつた時、失策する様な事があつても大變ですから、今教へて頂く譯に行きませぬでせうか。』

校長は苦り切つて答へた。『順序と云つても別に面倒な事はない。第一に（と力を入れて）校長が認定して、可いと思へば、郡視學さんの方へ届けるので、それで、ウム、その唱歌が學校生徒に歌はせて差支へない、と云ふ認可が下りると、初めて校歌になるのです。』

『ハ、ア、それで何ですな、私の作つたのは、其正當の順序とかいふ手數にかけなかつたので、詰り、早解りの所が、落第なんですか。結構です。作者の身に取つては、校歌に採用されると、されないとは、完く屁の様な問題で、唯自分の作つた歌が生徒皆に歌はれるといふ丈けで、もう名譽は十分なんです。ハ、ハ、ハ、これなら別に論はないでせう。』

『然し、』と古山が繰り出す。此男然しが十八番だ。『その學校の生徒に歌はせるには矢張り校長さんなり、また私なりへ、一應其歌の意味でも話すとか、或は出来上つてから見せるとかしたら穩便で可いと、マア思はれるのですが。』

『のみならず、學校の教案などは形式的で記す必要がないなどと云つて居て、宅へ歸ればすぐ小説などを書くんださうだ。それで教育者の一人とは呆れる外はない。實に、どうも……。然し、これはマア別の話だが。新田さん、學校には、畏くも文部大臣からのお達しで定められた教授細目といふのがありますぞ。算術、國語、地理、歴史は勿論の事、唱歌、裁縫の如きでさへ、チャンと細目が出来て居ます。私共長年教育の事業に従事した者が見ますと、現今の細目は實に立派なもので、精に入り微を穿つとでも云ひませうか。彼は十何年も前の事です、が、私共がまだ師範學校で勉強して居た時分、其の頃で早や四十五圓も取つて居た小原銀太郎と云ふ有名な助教諭先生の監督で、小學校教授細目を編んだ事があります、其時のと今のと比較して見るに、イヤ實にお話にならぬ、冷汗です。で、その、正眞の教育者といふもの